

看護職の能力向上に関する研究 (看護管理学分野)

大学教育における自律性獲得に関する研究

伊藤 收 (岩手県立大学看護学部、教授)、遠藤 良仁 (岩手県立大学看護学部、講師)

<要旨>

本研究は、岩手県立大学看護学部学生の自律性獲得の特徴を明らかにすることを目的に、2012年度入学生について2014年度までのデータを2015年度に発表したものである。看護学部生に岩手県立大学の理念の認知、自律性の自覚とその理由等を調査した。結果、理念は約8割が認知していた。また、自律性の自覚は1年次の平均値が「23.1%」から3年次では「40.8%」に上昇していた。自己の出来ている側面と課題となる側面の両側面を自覚できることと自律性獲得の自覚とに関連性が示唆された。

1 背景・目的

岩手県立大学 (以下、本大学) は「深い知性と豊かな感性を備え、高度な専門性を身につけた自律的な人間を育成する」ことを建学の理念とし、各学部等の教育が行われている。専門職養成を担う看護学部 (以下、本学部) においては日進月歩に変化する医療・看護分野等において特に自律性獲得は重要な概念となっている。

本学部における自律性獲得に関する教育成果については、卒業生の活躍の実態や病院管理者等によるフィードバックから、ある程度果たされていると推察されているが、自律性を本学の学修過程でどのように獲得していくのかや、そのプロセスは充分に明らかにはなっていない。

学習者の自律性獲得の調査は、今後の効果的な教育改善への示唆となり、生涯にわたる専門職業人としてのキャリア形成にも影響すると考える。そこで本研究では、自律性獲得に関する本学部教育の形成的評価の観点から1年生と3年生を対象として、自律性獲得の特徴を明らかにすることを目的として行った。

2 研究方法

2012 (平成24) 年から、事前調査によって研究者間で精査した入学時に検証可能な自律に影響する項目について調査を行っている。調査時期は、1年次は入学時に近い状況を把握するため入学年の7月、3年次は、本学の教育のほぼ3/4を終え、最終学年で何らかの教育的還元が可能な1月としている。そして、本研究は2012年度入学生を対象に、1年次と3年次のデータを分析対象とした。

なお、倫理的配慮として本学研究倫理審査委員会の承認を得たうえで、対象者への調査票の配布は、研究者が担当する科目終了後に、研究目的、方法、匿名性、参加の自由と拒否する権利および参加 (不参加) による不利益の無いことなどについて説明した文書とともに説明・配布し、留め置き法にて回収した。

3 研究の概要

1. 配布数および回収数について

1年次は、アンケート配付数88部、回収数54部 (回収率61.4%)、3年次は88部配付し、回収数42部 (回収率

47.7%) であった。

2. 1年次の理念の認知の程度

理念の認知度は83.3% (45名) であった。

3. 自律性獲得状況の変化

1年次で無回答の5名を除いた49名と3年次の自覚を比較した。自身の自律性の自覚を0~100%の自己評価で尋ねた結果、1年次平均値23.1% (標準偏差18.1、最大値70%、最小値0%) から3年次平均値40.8% (標準偏差18.3、最大値:80%、最小値:5%) へ17.7ポイント上昇し、統計学的にも3年次の自己評価が有意に高くなっていることが確認された ($t(89)=4.628, p<.01$)。

次に、3年次に尋ねた自律性獲得の理由について、自由記述の意味内容に沿ってポジティブ理由群、ネガティブ理由群、ポジティブ・ネガティブ理由群の3群に分け、群間で比較した結果、ネガティブ理由群、ポジティブ・ネガティブ理由群共に1年次より3年次の自己評価が高いこと、さらに、1年生では、ポジティブ・ネガティブ理由群、ポジティブ理由群、ネガティブ理由群の順で、平均値が高くなる傾向が確認された。このことから、自身の出来ている側面と課題の両側面を自覚できるようになることと自律性獲得が関連していることが示唆された。

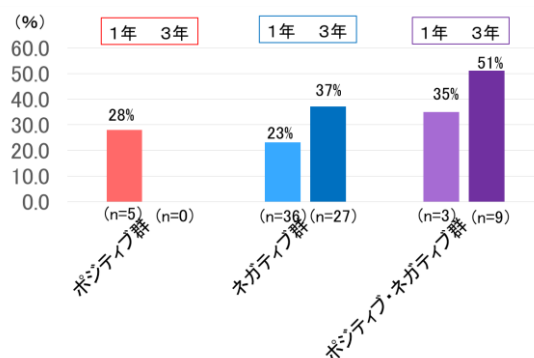


図1: 自律性獲得の自覚

4 今後の具体的な展開

今後は、卒業時の自律性獲得の状況や卒後の状況との関連を調査すると共に、学部教育においては、学生が自らの出来ている点と課題の両側面を自覚し、自ら目標を設定し学修を遂行できるような支援を行っていきたい。